

学生ボランティアの自律性を促すタスク管理ツールの要素検討

三上 滉史, 真嶋 由貴恵, 梶田 聖子
大阪府立大学大学院人間社会システム科学研究科

Elemental Study of Task Management Tools to Promote Student Volunteer Autonomy

Koji MIKAMI, Yukie MAJIMA, Seiko MASUDA
Graduate School of Humanities and Sustainable System Sciences,
Osaka Prefecture University

In recent years, the awareness of social participation among young people has increased, and students are also using volunteer centers at universities. However, there is a situation in which some students who are leaders are feeling mentally exhausted while promoting “planning type volunteers” to plan and prepare for the day. One possible reason is that tasks are concentrated on student leaders due to the involvement of members and low autonomy. Therefore, in this research, in order to reduce the mental fatigue of student leaders, we examined the necessary elements to develop a task management tool that encourages members to be autonomous. As a result, the method that introduced the consideration factor improved the autonomy of the members, but did not reduce the mental fatigue of the student leader. Therefore, it turned out that an approach from the aspect other than improvement of autonomy is also necessary.

キーワード: ボランティア, 自律性, タスク管理, 学生

1. はじめに

近年, 東日本大震災をきっかけに, 若者の社会参加意識が高まっている. 20代を対象に「何か社会のために役立ちたいと思っているか」を尋ねた内閣府世論調査結果では, 「思っている」という回答が震災後に10%以上増加していることがわかった⁽¹⁾. 大学生のボランティア活動も, 東日本大震災をきっかけに盛んになっている.

しかし, 大学生がボランティア活動を行う中, 一部の学生に精神的疲弊が起こっているという現状がある. 特に「企画型ボランティア」に参加する学生に見られることが多い.

ボランティア活動には「一般型ボランティア」と「企画型ボランティア」がある. 「一般型ボランティア」は当日のみ活動し, 与えられたタスクをこなす. 一方, 「企画型ボランティア」は当日に向けて準備をし, 当

日集まった参加者をまとめ, 後日振り返りを行う. このように, 「企画型ボランティア」は「一般型ボランティア」よりもタスク量が多いうえに, 毎年行われている活動でも引継ぎがなされていないことがあるため, 自律性(自ら考えて行動すること)も必要になる.

「企画型ボランティア」を行う中で, 「メンバー間の関係が対等であること」が活動の特徴⁽²⁾であるにも関わらず, 実際には責任感の強い者や活動経験を積んでいる者がリーダーとなって進めることが多い. また, 学生にはボランティア活動以外にも勉強等の都合があり, ミーティングに参加できないことによる関りの低さや, リーダー以外の自律性の低さによって, タスク分配がうまくいかず, リーダーにタスクが偏ってしまうことが往々にしてある. その結果, リーダーの学生に精神的疲弊が生じており, メンバーの自律性の促進が必要と考えられる.

2. 関連研究

これまでに、「ボランティア」「自律性促進」に関する研究は数多くされている。

ボランティアに関する研究は、活動者のモチベーションや活動の継続要因に関する調査が行われてきた。村山ら^③は、予備調査で行ったインタビュー結果を参考に、健康推進員（行政養成型ボランティア）が感じる活動満足感、活動負担感の尺度を開発した。米澤^④は、ボランティアを辞めたいと思ったことがあるボランティア登録者を対象に継続要因を分析したところ、ボランティアを『仲間と一緒にいける楽しみ』だと感じている者ほど、ボランティアの休止希望が低くなることを明らかにした。三上ら^⑤は日常的にボランティア活動を行っている40代以上と、大学のボランティアセンターを利用して活動を行っている学生を対象に、「ボランティア活動に対してのモチベーション低下とその理由」についてインタビュー調査を行ったところ、40代以上は身体的疲弊によるものが多かったのに対し、学生は精神的疲弊によるものが多かった。

自律性促進に関する研究は、複数人での作業と授業形式での導入による調査が行われてきた。Johnmarshallら^⑥は、生徒の自律性を支援するための教師の11の行動を検討した結果、生徒の自律性と成績に正の相関があることを明らかにした。特に表1の8つの行動については、より厳格な検定を用いても有意なままであった。伊藤ら^⑦は、複数のユーザーが非対面で作業を行う際に、作業に対するモチベーションを維持しながら課せられた目標を達成するために必要なシステムの仕組みについて検討した。その結果、グループメンバーの存在・グループ作業を意識させるといった、自律性を刺激させる仕組みが、ユーザーの作業意欲を向上させる可能性があることがわかった。西田ら^⑧は、自律的な学習者の効果的な育成の在り方

表1 生徒の自律性を支援する教師の行動^⑥

| | |
|----------------------|-----------|
| 生徒の話を聞く | 励ましを与える |
| 生徒が自分のペースで作業できるようにする | ヒントを提供する |
| 生徒と話す | 生徒の質問に答える |
| フィードバックとしての称賛を与える | 見通しの伝達をする |

について検討するために、生徒の自律的な学びを生み出す要素を組み込んだプログラムを開発して調査したところ、自己調整学習と生徒相互の勇気づけが自律的な学習を促進する可能性があることを明らかにした。

以上のように、ボランティア活動の継続要因としては一緒に活動を行うメンバーとの関係性が重要であること、また、メンバーとの関係性は自律性促進においても重要な要因であることがわかった。

しかし、ボランティアに関する研究は、多くが社会人の取り組む「一般型ボランティア」を対象としており、学生が行う「企画型ボランティア」を対象を絞った研究は見られなかった。また、自律性促進に関する研究は、授業形式での調査によるものやモデルの提案^⑨が多く、自律性が必要な「企画型ボランティア」を対象とした研究は見られなかった。

3. 研究目的

本研究では、「企画型ボランティア」でリーダーを務める学生のタスク過多による精神的負担を軽減するために、ボランティアに携わる学生らの自律性促進と関わり具合や得意なことを共有できる要素を取り入れたタスク管理ツールを作成し、その有用性について検討を行う。

4. タスク管理ツールに取り入れた要素

4.1 自律性を高める要素

自律性を刺激するためにメンバーとタスクを意識させる仕組み^⑩を以下のように取り入れる。

4.1.1 メンバーを意識させる仕組み

参加メンバーが一覧で表示できるようにする。また、タスクと一緒にタスク担当を表示させる。

4.1.2 タスクを意識させる仕組み

Johnmarshallら^⑥の研究でわかった表1の行動から「フィードバックとしての称賛を与える」「見通しの伝達をする」を取り入れる。タスクごとに、優先度、締切、達成度を表示させる。

4.2 関わり具合・得意なことを共有する要素

学生が勉学等の都合によりミーティングに参加できないことによる関りの低さを解消するため、事前に関

り具合や得意なことを共有できる仕組みを取り入れる。これにより、関り具合の低い学生でも得意なことを活かした活動が期待できる。また、それを参考にしてタスクの割り振りができるため、学生リーダーへのタスクの偏りを防ぐことができる。

5. 研究方法

5.1 研究概要

本研究では、タスク管理ツールに必要な要素を検討するために、自由な使い方ができるタスク管理ツール「Trello」を活用した。自律性促進と関り具合・得意なことの共有の要素を取り入れた「Trello」の運用方法を図1に示す。

メンバーを意識させるために、「Trello」の上部にメンバーリストを設置し、それぞれのプロフィール欄に関り具合・得意なことを記入するよう設定した。

タスクを意識させるために、その優先度を「高・中・低」に分け、優先度ごとにリストを用意し、タスクをカードとしてリストに追加することができるようにした。また、タスクごとに担当、締切、達成度を設定することができる。タスクを達成したら、優先度ごとに用意してある「完了」のリストにタスクを移動させる。

5.1.1 対象者

本研究は、研究協力に同意の得られたA大学ボランティアセンターを利用してボランティア活動を行っている大学生22名を対象に実施した。尚、この研究に先立って研究者の所属する大学の倫理委員会の承認を得ている。

5.1.2 調査群

検討要素を取り入れた運用方法が有用かを判断するために、「明確なリーダーの存在」「タスク管理ツール」「運用方法」の有無によって、「自律性」「精神的疲弊

「タスクの偏り」に差が見られるかを比較、検討する。

調査群は対照群を3つ、実験群を1つ設定する。どの群も企画型ボランティアであり、引継ぎは行われていない活動である。

まず、3つの対照群について以下に説明する。

- ・調査群①は従来通り、リーダーを明確には決めず、「Trello」も導入しない。学年構成は、各学年が数人ずつ所属している。

- ・調査群②は、明確にリーダーを決めるが、「Trello」を導入しない。学年構成は、1回生が4人、4回生が1人である。

- ・調査群③は明確にリーダーを決め、「Trello」を導入するが運用方法は掲示しない。学年構成は、全員が1回生である。

次に、実験群について説明する。調査群④は明確にリーダーを決め、運用方法を掲示して「Trello」を導入する。学年構成は、各学年が数人ずつ所属している。

それぞれの群の構成、人数を図2に示す。

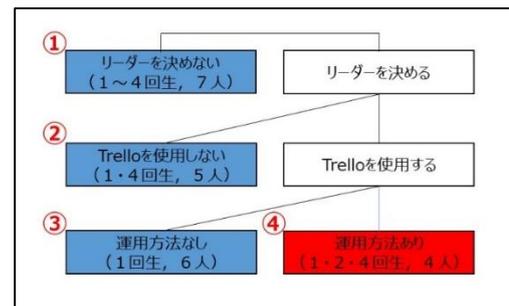


図2 調査群

5.2 評価方法

村山ら^③が開発した活動負担感の尺度を基に、「精神的負担」「活動量負担」の項目に、「自律性」の項目を加えたアンケートを活動の前後に4段階評価で回答してもらう。アンケート項目を表2に示す。また、活動後にそれぞれの調査群でリーダーを務めていた学生



図1 検討要素を取り入れた「Trello」画面

に対し、活動中の負担、メンバーの自律性、調査を通しての感想についてインタビュー調査を行う。

表 2 アンケート項目

| 項目 | 質問番号 | 質問内容 |
|-------|------|-------------------------|
| 精神的負担 | ① | 活動内容は難しいと思う |
| | ② | チーム内の人間関係は難しいと思う |
| | ③ | 責任が重いと感じる |
| | ④ | ボランティア活動内容に興味を持ってないと思う |
| | ⑤ | ボランティア活動をすると精神的に疲れる |
| 活動量負担 | ⑥ | ボランティア活動のタスク量が多いと思う |
| | ⑦ | ボランティア活動が忙しいと思う |
| | ⑧ | ボランティア活動は体力的にきつい |
| 自律性 | ⑨ | 活動中、自分で考えて発言・行動ができていない |
| | ⑩ | 活動中、誰かが何とかしてくれるとは思っていない |
| | ⑪ | ボランティア活動に積極的に関わられたと思う |

6. 結果

アンケート結果、インタビュー結果は表 3、4 のようになった。以下、「明確なリーダーの存在」「タスク管理ツール」「運用方法」の有無を比較検討していく。

6.1.1 リーダーの有無の比較

リーダーの有無の比較を行うため、調査群①②を見る。調査群①では特にリーダーを決めていなかったが、上回生が中心となって進めていた。どちらの群も活動前後でリーダーの活動量負担は増えていたが、リーダーを明確に決めていない調査群①では活動後にリーダーの精神的負担が 10%ほど軽減している。この原因と

して、インタビュー調査からリーダー自身が、タスク量が多いと感じた時は自ら減らすなどの工夫をしていたことが明らかになった。また、タスクの偏りは両群ともリーダーと上回生に偏っていた。

メンバーの自律性は、調査群①では 1 人も向上しなかったが、明確にリーダーを決めている調査群②では約半数が向上していた。

6.1.2 タスク管理ツールの有無の比較

タスク管理ツールの有無の比較を行うため、調査群②③を見る。どちらの群もリーダーの精神的負担は変わらなかったが、リーダーの活動量負担は調査群③では活動後に減少しており、タスクの偏りも起こっていなかった。

調査群③はタスク管理ツールを導入していたが、使われることはなく、各々が紙媒体でタスクのリストを作って管理していた。この理由としては、「パソコン等の機器を使い慣れていないから」とインタビュー調査から明らかになった。メンバーの自律性は、両群とも半数が向上していた。

6.1.3 運用方法の有無の比較

運用方法の有無の比較を行うため、調査群③④を見る。調査群③は 6.1.2 で述べたように、リーダーの精神的負担は変化せず、活動量負担が軽減していたが、実験群である調査群④ではリーダーの精神的・活動量負担のどちらも増加していた。両群ともタスクの偏りは起こっていなかったが、調査群④では 1 人当たりのタスク量が調査群③と比較して極端に多くなっていた。

メンバーの自律性は、調査群③では約半数の向上だったのに対し、調査群④ではメンバーの 7 割が向上していた。また、メンバー全員が週 2 回は「Trello」を確認していたことから、活動への意識が向上したと考えられる。調査群④へのインタビュー調査から、「担当が明示されていたので意識していた」「優先度がタスク

表 3 アンケート結果

| 調査群 | | 対照群 | | | 実験群 |
|------------------|-----------|-------|-------|-------|-------|
| | | 調査群① | 調査群② | 調査群③ | 調査群④ |
| リーダー (N = 4) | 精神的負担(推移) | 10% ↓ | — | — | 5% ↑ |
| | 活動量負担(推移) | 8% ↑ | 17% ↑ | 17% ↓ | 17% ↑ |
| メンバー (N = 18) | 自律性(人数割合) | — | 50% ↑ | 50% ↑ | 70% ↑ |

表 4 インタビュー結果(抜粋) N= 4

| | | |
|----|-----------------------------------|---|
| 質問 | 今回、活動を行った中で精神的に辛かった場面はありますか | |
| 回答 | 調査群① | つらくはなかったが、自分がしないと誰もしないのではないかという不安があった。 |
| | 調査群② | はい。全体を把握している人が少なく、自分がしないといけないと感じた。やることや考えることが多い。 |
| | 調査群③ | はい。予定通りに進まなかった時がしんどかった。 |
| | 調査群④ | はい。指示する側だと、何をしたらいいかわからなかったのがしんどかった。 |
| 質問 | メンバーは積極的に関わり、行動してくれたと思いますか | |
| 回答 | 調査群① | たぶん、してくれたと思う。 |
| | 調査群② | はい。当日、自分の手が回らないところを積極的にやってくれる。 |
| | 調査群③④ | はい。特にメンバー間の問題もなかった。 |
| 質問 | メンバーの一部にタスクが偏っていたと思いますか | |
| 回答 | 調査群① | 思うが、以前よりは緩和されていると思う。「やりたくてやっているか」を重視したい。 |
| | 調査群② | はい。自分はかなり偏っている。 |
| | 調査群③ | 自分が把握している限りは起こっていなかったと思う。 |
| | 調査群④ | 自分のイメージでは、先輩に偏っていたと思う。 |
| 質問 | その他、この研究に参加して気づいたことや感想があれば教えてください | |
| 回答 | 調査群① | しんどいと思ったら、周りを頼ったり、自分でタスクを減らしたりしている。 |
| | 調査群② | 特になし。 |
| | 調査群③ | 普段からパソコンやスマホを使っていないので、慣れている紙媒体でやった。みんなでやろうと言ってくれたので、最後の方は特に重責は感じなかった。 |
| | 調査群④ | タスク管理ツールが使いやすく、個人でも使い始めた。他の企画でも使ってほしい。 |

をこなすうえでわかりやすかった」と好評をいただいた。よって、「Trello」による「自律性を高める要素」は効果的なことがわかった。しかし、検討要素 2 つ目の「関り具合・得意なことの共有」は、されていなかった。これについては、「する必要を感じなかった」との意見が聞けた。

また、リーダーの精神的負担が増加していたことについては、「指示するのが辛かった」「指示される方が楽」との意見が聞けた。

6.2 考察

対照群と実験群との比較をまとめたものを表 5 に示す。明確にリーダーを決めていなかった調査群①では、結果として経験のある上回生が中心となって進めており、タスクもその上回生に偏っていたが、自らタスク量を調節することで負担を減らしていた。タスクの偏りが起こっていなかった調査群④では、1 人当たりのタスク量が多くなり活動量負担が増え、結果としてリーダーの精神的負担が増加したことが考えられる。よって、タスク管理にはタスクの偏りだけでなく、1 人当たりのタスク量も考慮する必要があると考える。

タスク管理ツールは、普段からパソコン等の機器を

使い慣れている者は積極的に使用したが、使い慣れていない者は全く使用しなかった。よって、使い慣れていない者への配慮として、丁寧な運用方法の説明やツールの使いやすさが必要だと考える。

「自律性を高める要素」「関り具合・得意なことを共有する要素」を取り入れたタスク管理ツールを使用した調査群④では、メンバーの自律性・活動への意識が向上し、タスクの偏りも軽減するが、リーダーの精神的負担・活動量負担の軽減には至らなかった。これは、タスク過多によるものだけでなく、指示・とりまとめをすることによる重責が学生リーダーの負担になっていることが、インタビュー調査から伺えた。実際、調査群③ではメンバーが同回生のみで構成されており、全員が平等な立場で活動を進めることができたため、リーダーの負担が軽減していたことが考えられる。よって、タスク管理には、自律性促進要素のほかに、メンバーの関係性、とりまとめをやすくするための工夫も考慮する必要があると考えられる。

関り具合・得意なことを共有する要素は、より自律性につながると考えられるが、ボランティアのような対等な立場同士の小さなグループではその必要性を認

識できなかったと思われる。グループ単位での活動を意識し、共有の必要性を認識するための工夫が必要である。

今回、4つの群を対象としたが、全体のタスク量や参加者の個別性に差異が見られたため、定量的な評価は難しく、定性的な評価にならざるを得なかった。

表 5 対照群と実験群の比較まとめ

| まとめ | 対照群 | | | 実験群 |
|--------|-------------|----------|----------|------------|
| | 調査群 ① | 調査群 ② | 調査群 ③ | 調査群 ④ |
| 精神的負担 | メンバーの2割が向上 | | | |
| 活動量負担 | メンバーの5割が向上 | | | |
| 自律性 | メンバーの2割が向上 | | | メンバーの7割が向上 |
| タスクの偏り | リーダーと上回生に偏る | | 偏りなし | |

7. まとめ

今回の研究では、学生ボランティアリーダーの精神的疲弊を軽減するために、ボランティアに携わる学生らの自律性を促すタスク管理ツールの要素について検討し、4つの調査群で実証を行った。その結果、自律性向上の要素を取り入れたタスク管理ツールはタスクの偏りを防ぎ、ボランティア活動に携わる学生の自律性を向上させたが、学生ボランティアリーダーの負担軽減に明らかな影響は見られなかった。本研究の限界として、ボランティアの内容や参加者の個別性により、定量的な評価が困難なことが挙げられる。

今後は、より多くのボランティア活動を対象に、精神的・活動量負担を軽減するための介入方法の検討と、今回明らかにできなかったタスク管理ツールにおける個々の能力の共有と自律性の関係についてさらに検討を行う。

謝辞

本研究の調査に同意・ご協力いただいた A 大学学生の皆様、並びに職員の松居氏に感謝する。

参考文献

- (1) 内閣府: “社会参加に関する世論調査”, <https://survey.gov-online.go.jp/h22/h22-shakai/index.html> (2020年3月31日確認)
- (2) 倉本宣, 永井敦子: “桜ヶ丘公園雑木林ボランティアの活動と組織に対する意識”, ランドスケープ研究 65 巻 5 号, pp.455-460 (2001)
- (3) 村山洋史, 田口敦子, 村島幸代: “健康推進員活動における活動満足感, 活動負担感の尺度開発”, 第 53 巻日本公衛誌第 12 号, pp.875-883 (2006)
- (4) 米澤美保子: “ボランティア活動の継続要因”, 関西福祉科学大学紀要第 14 号, pp.31-41 (2010)
- (5) 三上滉史, 真嶋由貴恵, 榎田聖子: “ボランティア学生の自律的思考の促進とモチベーション維持モデルの検討”, 教育システム情報学会 2018 年度学生研究発表会, pp.115-116 (2019)
- (6) Johnmarshall Reeve and Hyungshim Jang: “What Teachers Say and Do to Support Students' Autonomy During a Learning Activity”, Journal of Educational Psychology, Volume 98(1), pp.209-218 (2006)
- (7) 伊藤淳子, 松山みのり, 宗森純: “非対面状況におけるモチベーション維持を目的とした共同作業支援システムの検討”, ヒューマンインタフェース学会研究報告集, Vol.19, No.2, pp.230-255 (2017)
- (8) 西田寛子, 久我直人: “自己調整学習の理論に基づいた「生徒の自律的な学び」を生み出す英語科学習指導プログラムの開発とその効果”, 日本教育工学会論文誌 42 (2), pp.167-182 (2018)
- (9) Koji Mikami, Yukie Majima, Seiko Masuda: “Proposal of a Task Management Tool to Promote Student Volunteer Autonomy”, IIAI AAI 2020 (投稿中)